



特集 “学生の学修成果の実質化”

Contents

- | | |
|--|---|
| 1年生約1万人による学部横断型授業
「日本大学ワールド・カフェ」を実施 | 2 |
| 「日本大学 IR シンポジウム
大学における IR の意義—その現状と課題—」開催 | 3 |

COVER PHOTO

「自主創造の基礎2」で学部横断型授業として行われた「ワールド・カフェ」の様子。約1万人の1年生が対象となり、学部混合のグループを組み、「日本大学でどのような学生生活を送るか」などのテーマで語り合った。

学生の学修成果の実質化を目指して

本学では、教員が「何を教えたのか」から、学生が「何をできるようになったのか」を重視するアウトカム基盤型教育の実現に力を入れています。それを実現するために、各学部では日本大学教育憲章に基づいたディプロマ・ポリシーなど三つの方針の見直しを図るとともに、それに伴うカリキュラムの体系化や体系性を踏まえた授業内容の充実を進めています。

全学レベルでは、日本大学教育憲章に掲げられている各項目の実現を目指し、その基礎を充実するべく、全学共通初年次教育科目「自主創造の基礎1・2」を展開。「自主創造の基

礎2」では、学部横断型授業「日本大学ワールド・カフェ（以下、ワールド・カフェ）（通称N-MIX）」を導入し、「他者との比較や理解」「コミュニケーション能力の向上」等を目指しています。

また、学生の能力向上には、実際にどの程度、学修成果が得られたのかを客観的に測定・分析するIRの取組も欠かせません。平成29年6月には日本大学IRシンポジウムを開催するなど、IR実現に向けた取組も進めています。

今号では、以上の2点の事例を中心に、本学の教育の質保証に向けた取組を概観します。

事例 1

1年生約1万人による学部横断型授業「ワールド・カフェ」を実施

平成29年10月15日、22日、6つのキャンパスで、全学共通初年次教育科目「自主創造の基礎2」に導入した「ワールド・カフェ（通称N-MIX）」が行われました。複数学部の学生が混在したグループで考えを深めました。

◎学部・学科混合のグループワーク

「自主創造の基礎2」では、学生が多様な価値観や考えに触れることにより、自らの視野を広げ、専門性や教養力の醸成につながる礎を築いていくという目的の下、2017年度から学部や学科を超えた交流を行う授業を導入しました。16学部87学科を擁する本学の強みを生かし、学生が多くの学部・学科の学生と交流できるよう、ワールド・カフェ形式を採り入れたのが特色です。これは、カフェのようなリラックスした雰囲気の中での自由な会話を通して、生き生きとした意見の交換や新たな発想の誕生が期待できるという考え方に基づいた話し合いの手法です。

「ワールド・カフェ」は2日間で計3回行われました。1年生約1万人は各自指定された時間・会場に集まり、学部・学科、男女混合で1グループ6人となり、決められたテーマで話し合いました。



カフェのような雰囲気がコンセプトのため、菓子類の持ち込みを自由とし、飲食しながら話し合いが進められた。

◎グループを変え、同じテーマで議論

グループワークは、次のようなねらいで、1回25分間で計3回行われました。

- ・ラウンド1 テーマについて探求する
- ・ラウンド2 アイデアを他花受粉する
- ・ラウンド3 持ち帰って統合する

ラウンド1・2は、同じテーマについてメンバーを入れ替えて語り合い、ラウンド3は、ラウンド1のグループに戻り、ラウンド2で出した意見を持ち帰って語り合うという流れとなります。「他花受粉」は、最初に話したグループでのアイデアが、ほかのグループのメンバーに広がり、交わり、新たな発想が生み出されることをねらいとしています。

ラウンド1・2のテーマは、「ニチダイとはどんなところですか」「マナビとはどんなことですか」「いいオトナとはどんな人ですか」と実施回により変わりますが、ラウンド3のテーマは3回とも共通で、「日本大学でどのように学生生活を送りますか」でした。

各ラウンドでは、テーマについて自由に考えを述べ、それを模造紙に書いていきました。発想が広がって、話し合いが活発になり、多くの気づきが得られるよう、関連があると思ったキーワード同士を線で結んだり、新たな言葉を書き加えたりしていきます。

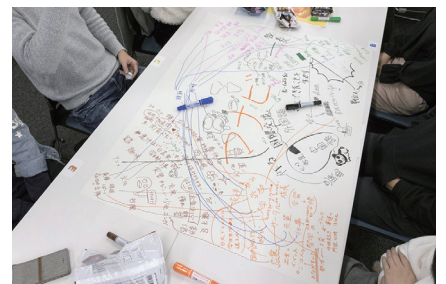
教員はファシリテーターとして、全体の進行役は担いますが、話し合いの内容

には関与しません。「自主創造の基礎1」で培った協働性や主体性などを発揮しながら、学生同士で話し合いを進めていきました。

◎他学部の学生の考えに刺激を受ける

グループワークは、グループのメンバー全員が初対面であるため、その緊張をほぐすアイスブレイクを兼ねた自己紹介から始まりました。

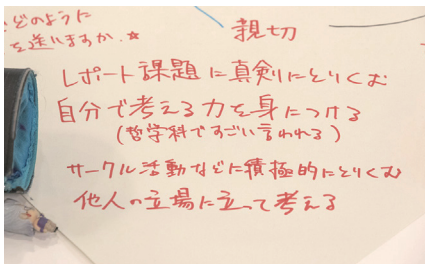
続いて、ファシリテーターからテーマが示され、ラウンド1がスタート。学生は次々と模造紙に思いつく言葉を書いていきました。例えば、2回目のテーマ「マナビ」では、「国語」「法学」など教科名や学問名、「戦い」「哲学」「終わらない旅」といった学びのイメージと、多種多様なキーワードが次々と出てきました。「しんどい」「できればやりたくない」など否定的な言葉がある一方で、「楽しい」「自分を高めてくれるもの」といった肯定的な言葉も挙がりました。



関係のありそうなキーワード同士を結び、話を発展させていく。終わる頃には多様な言葉が無数の線で結ばれていた。

合間には、学部間の情報交換を盛んに行う学生の姿が見られました。

ラウンド3では、これから日本大学で何を学んでいきたいかが語り合われていました。「弁護士になりたい」「国家試験合格が目標」など、具体的に夢を語る学生がいる一方、「自身の学部の学生は、自分も含め、夢が決まっていない人が多い」と言う学生もいました。それに対し、



2回の話し合いを経たラウンド3では、今後の学生生活に意欲を見せる言葉が書き連ねられていた。

「これからいろいろ経験して、やりたいことが見つかりたい。どちらがよい、悪いというわけではない」という意見が述べられました。

最後に、各グループで話し合った内容を共有するため、各自が模造紙を自由に見て回る時間が設けられました。また、ファシリテーターから数名が指名され、「個人的な人たちと出会い、話ができてよかった」「他学部の人たちのいろいろな夢を聞いて刺激を受けた」といった発表も行われました。

◎重要となる各学部での振り返り

最初は表情が固い学生が多く見受けられましたが、話し合いが進むにつれて徐々に打ち解け、話も弾んでいきました。授業終了後には、連絡先を交換し合う姿があちこちで見られました。また、模造



全体シェアでは、「他学部生の考えに刺激を受けた」という声があがった。

紙をスマートフォンで撮影し、記録に残す学生も大勢いました。

次回の授業では、今回の授業の振り返りとして、話し合った内容を400字程度にまとめたレポートを提出します。他学部生との交流による気づきが、今後の学びにどう生きていくのか、各学部で振り返りをしっかり行うことも重要になるでしょう。

事例
2

IRシンポジウム「大学におけるIRの意義—その現状と課題—」開催

平成29年6月17日、日本大学会館において、日本大学IRシンポジウムが開催されました。日本大学の教職員・学生が約230人が参加し、IRに関する知識や今後の課題について共有しました。

基調講演

◎データは大学の財産

基調講演には、同志社大学の山田礼子教授を迎え、「IR発展の経過と現状」をテーマに国内外のIRの現状を解説いただくと共に、山田教授が設立に関わった「大学IRコンソーシアム」での実践を紹介していただきました。

「大学IRコンソーシアム」は、学生調査分析を軸として、教育の質的向上に結びつける質保証システムの創出と全国規模のIRコミュニティの育成を目指すために設置された組織です。発足当初の参加校は同志社大学を含む4大学でしたが、現在は53大学に増え、その取



同志社大学社会学部部長・教授 山田礼子氏

組は広がっています。当初、4大学の統一したデータベースを作るのに1年を費やしたといいます。参加校の間で調査項目を統一し、比較を可能にしたため、容易に自大学の特徴を確認できるようになったことが大きな成果です。

最後に山田氏は、「データ収集には大変な苦勞を伴うことが予想される。ただ、『データは大学の財産』だということに関係部署で共有することが大事。例えば、学生意識調査と学生の成績情報を分析すれば、教学マネジメントの支援、教育の内部質保証のエビデンスになる」と締めくくりました。

事例紹介

◎PDCAサイクルの指標としてIRを活用

次に、國學院大学の総合企画部企画課長の後藤匠氏から、國學院大学における大学IRの取組を紹介していただきました。同大学では、大学IRの目的を「大学の中期計画に基づく立体的なPDCAサイクルの構築」と設定。職員主体で取り組んでいます。平成26年度から、各課が連携してデータを集め、入試区分・



國學院大学総合企画部企画課長 後藤匠氏

累積GPA・修得単位数・就職先などのデータと、学生アンケートを掛け合わせて分析し、入試制度改革、カリキュラム改訂、キャリア形成等の基礎資料として活用。また、中期計画の目標値の設定にもIRデータは重要と説明しました。

最後に、課題として「中期計画の中には、学修成果など数値目標が設定しにくい分野もある。教育の質を高めて行く上でどのようにIRを活用し、目標を設定していくか議論したい。今後は、教員にも協力を仰いでいく意向」と述べました。

◎IR機能の拡大から深化を目指す

次に本学理工学部の岡田章教授から、理工学部におけるIRの取組を紹介し

ていただきました。

理工学部では、教学IRと学部運営マネジメントへの活用を目的として、入試、履修、出席状況、成績や就職などの教学IRデータの分析を行っています。

今回の講演では、入試区分と退学率の相関などのデータ分析結果を紹介し、理工学部におけるIRのデータ分析の可能性を示しました。

また、組織の課題として、学部内での連携のほか、本部や他学部の連携を指摘。「執行部が変わっても継続して調査分析を行いたい。機能の拡大から機能を深化させる時期にある」と話しました。



理工学部 情報統括委員会委員長 岡田章教授 (現理工学部長)

パネルディスカッション

◎ IR専門家の育成が急務

全学FD委員会プログラムワーキンググループリーダーである河相安彦教授がモデレーターとなり、「IRの課題と今後の展望」をテーマにパネルディスカッションが行われました。河相教授は、基調講演と事例紹介に共通するキーワードは「連携」だとし、部署間の連携についてパネリストに質問しました。

次に、会場から寄せられた質問について、意見交換が行われました。特に多かった質問が、IR専門職の必要性について。山田教授は、「アメリカの大学では、『IRer』と呼ばれるIRの専門スタッフが存在する。日本でも『IRer』を高度専門職として養成していく必要がある」と話しました。

そして、全学的にIR活用を広げていくためのポイントについての質問も相次ぎました。FD推進センター副センター長の辻忠博教授は、「全学FD委員会ではFDやIRに関するワークショップ



フロアからは、パネリストへIR導入の具体的なプロセスについての質問も出された。

を開催している。教育学の専門知識を持たない教職員も積極的に関わり、各学部で裾野を広げてもらうことが大事」と説明。また、本学学務部長である松林肇氏は、「組織的にデータを活用し、“日本一教育力のある大学”を目指したい」と意欲を示しました。理工学部の中村文紀准教授は、「データ活用は重要だが、数字ばかりに目を向けるのではなく、学生一人ひとりと向き合うことも大切にしたい」と述べました。会場と登壇者による活発なやりとりによって、多大な示唆が得られたシンポジウムとなりました。

FD活動を中心に全学的な教学改革を進める

本学は、教学に関する全学的な基本方針として「日本大学教育憲章を基点とした学生の成長を一義的に捉えた全学的な教育の質保証体制の確立」を目指すとしており、その中で教育の質保証体制を実質化するためのFDの充実（学生の主体的な学びの醸成を視野に）が盛り込まれています。今回特集した「ワールド・カフェ」の実施は、この宣言の遂行を担う大きな取組といえます。異なる学部の初対面の学生同士が共通のテーマについて意見を交換し、刺激を受けることで、相補的な学生の成長につながるものと考えると同時に学生自身の学びのモチベーションにつながったことでしょう。

また、日本大学IRシンポジウムも開催され、参加者は本学が教学IRを推進する意義を理解し、教学IRを進めていく第一歩となりました。現在、教学IRは、各学部により展開されていますが、進捗状況は異なっているのが現状です。

近い将来、各学部のIR部門が機能し、PDCAサイクルが構築されれば、本学の教育の質保証をより強固に実現するための基礎になるものと考えます。将来的に全学的に情報をまとめれば、本邦最大の大学ビッグデータとして本学の教学資産となるでしょう。

今号では、日本大学教育憲章を踏まえ、多様性を生かし学生の主体性を育む「日本大学ワールド・カフェ」、学生の教育に関わる様々なデータを有効に教育改革に活用する「教学IR」の取組を紹介しました。日本大学の教学改革は学生の学びに対し、様々な取組を続けています。本学に関わる全教職員が“学生と向き合い”，こうした大学の組織的な取組を理解し、個々の努力や工夫を的確に組み合わせていくことが重要といえるのではないのでしょうか。（全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループリーダー・医学部 藤田之彦教授）

*本ニュースレターに記載した役職・資格・学年等は、イベント開催当時のものです。

日本大学 FD NEWSLETTER 第12号

発行日: 平成29(2017)年12月1日(年2回発行) ©次号は平成30年4月発行予定
 発行 者: 日本大学FD推進センター センター長 加藤直人
 〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24 電話:03-5275-8314 FAX:03-5275-8315
 e-mail:adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp http://www.nihon-u.ac.jp/fd-center/
 所 管 部 署: 日本大学 本部 学務部学務課
 企画・編集: 日本大学全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループ

「日本大学 FD NEWSLETTER」に関する御意見や御感想などがありましたら、学務部学務課 (adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp) へお寄せください。
 本ニュースレターに掲載した文章、写真等の無断転載・複製を禁じます。 Copyright(C)Nihon University 2017 All Rights Reserved.

